

魚の目を知る君に

登場人物

ノア 性別不定

佐々木直人（ササキ ナオト）

古崎瑠衣（コサキ ルイ）

高倉雄大（タカクラ ユウダイ）

清掃アンドロイド

風船アンドロイド

！作中のアンドロイドは、すべてかかとの高い靴を履いている。

プロローグ

電子音

昼、佐々木、自室でノアを横目に座っている。

佐々木

いやあ、高い買い物しちゃったかな。でも新品で買うよりは安いし……。前から欲しかったっちゃ欲しかったし……。出世払い！出世払い！

ノア、起動開始。静かに動き始める。

佐々木

でも今月厳しいんだよね。これから給料も下がるのに……。

ノア

EV5967 起動完了。システム、動作、ともに問題ありません。初期設定を開始してください。

佐々木

うっわしゃべった！ひい！こう見るとほんとに人間とあんま変わんないわ……。その変わった靴履いてなきや判別できない！

ノア

初期設定を開始してください。

佐々木

やっぱ買ってよかったかもな！うん、欲しかったわけだし。

ノア

初期設定を開始してください。

佐々木

あっそうね初期設定ね。えーと、あー、じゃあ、まずは所有者の登録から。

ノア

んんっ俺は佐々木直人。直人と呼んでください。

ノア

直人。

佐々木

そうそう！やっぱすごいわ……。科学の進歩だわ……。あっ、後は君の名前決めなきゃね。

佐々木

んんじゃあ、ノア。

ノア

……ノア。

佐々木

そう！今日から君はノア。これからよろしくね。

ノア

私は、ノア。

佐々木

気に入ってくれたかな……。機械にそういうのはやっぱ無いのかな。っは！テンションあがるわあ！

ノア

直人、私はここで何をすればいいのでしょうか？

佐々木

あー！そっか、あんまり考えてなかったな。えっと、基本的な家事をお願いします。掃除、炊事、洗濯とか、身の回りの世話を。

ノア

分かりました。

ノア、部屋を見渡した後、掃除を始める。

佐々木 やっぱすごいわあ。……俺もそろそろ取りかかんなきゃね。

佐々木、しばらくノアの動向を観察した後、机に向かう。

暗転

第一章

電子音

夜、ノア、自室で料理をしている。

佐々木、封筒を手に戻ってくる。

佐々木

ただいま。

ノア

おかえりなさい。お疲れ様です。

佐々木

お、なんかいい匂いする。

ノア

今夜はカレーにしてみました。先に夕ご飯にしますか？

佐々木

んーそうしようかな。

ノア

分かりました。

佐々木、机に座り慎重に封筒を開ける。

佐々木

……はあ~~~~~

ノア

直人、どうしましたか？

ノア、机にカレーを置く。

佐々木

うーん。まただめだったっていうか、うーん……。

ノア

私にできることでしたら、相談に乗りますよ。

佐々木

あっ落ち込んではいるけど、そういうんじゃないのよ。

ノア

そうですか。

佐々木

ちょっとしたコンクールに応募したんだけど、今回も落選しちゃって……。

佐々木

作風が暗いんだって。それも個性だと思うんだけどなあ。

ノア

落ち込まないでください。私は応援しますよ。

佐々木

はは、ありがとね。

ノア

もし気が晴れないようでしたら、夕食を食べながらもかまいません。私とお話ししませんか？

佐々木

……お話し。

ノア

私には所有者の心理的な健康を保つためのプログラムが組み組まれています。きつと退屈させません。

佐々木

すごいなあ。じゃあお願いしようかな。

ノア
はい。では、今日はお仕事でどんなことがあったのか聞いてもよろしいですか？

佐々木、カレーを食べ始める。

佐々木
うーん、特にこれと言っていないかなあ。あ、でも今日は珍しく怒られなかったかも。

ノア
いつもそんなに怒られることが多いのですか？

佐々木
そうなんだよお。課長の口癖は「いつまで新人気分なんだ！」と「お前の代わりなんていくらでもいるからな！」ってやつだね。

ノア
それはパワハラではないでしょうか？手順に従って労働基準監督署へ通報を

佐々木
えっ、そんなことしないでいいから！

ノア
しかしパワハラは

佐々木
今の会社に居づらくなる方が困るんだ。それに、怒られるのは俺が悪いわけだし。

ノア
直人、

佐々木
それにしてもこのカレーおいしいね。実家のカレーとはまた違うわ。

ノア
……隠し味にウスターソースを入れているんです。一晚寝かしたカレーの
5
ような深みが出るんです。

佐々木
へえ。俺の家は母さんが蜂蜜入れてたかもなあ。

ノア
蜂蜜は、入れるとまろやかになるんですよ。よろしければ次回作るときは蜂蜜を隠し味にしましょうか？

佐々木
んー。それはいいかな。ウスターソースのカレーもおいしいし。あと、言っちゃったら隠し味にならないよノア。

ノア
そうですね。これからは聞かれるまで言わないようにします。

佐々木
うん。おいしかった！ごちそうさま。

ノア
おそまつさまでした。私が片付けますから、お皿はそのまま置いておいてください。

佐々木
ああ、そっか。もう自分で皿洗いとかしなくてもいいのか。便利だわあ。

ノア、皿洗いを始める。

佐々木、封筒を手取る。

佐々木
はあ。……また落選かあ。

暗転

佐々木、机にうずくまりそのまま就寝。
ノア、佐々木に毛布を掛ける。

第二章

電子音

深夜、ノア、自室で掃除中。

佐々木、帰ってくる。

佐々木

ただいま。あつノア掃除中なのね。ありがとね。いつも。

ノア

おかえりなさい。今日も遅いですね。

佐々木

残業が終わらんなくてね。あゝノアが来てから私生活が楽！やつぱ買ってよかったわ。

ノア、佐々木から鞆を受け取る。

佐々木、冷蔵庫からコーラを取り出して飲む。

ノア

直人、先にご飯にしますか？それともお風呂も沸いていますがどちらにいたしますか？

佐々木

わ！新婚さんがやるやつだ！彼女にもやってもらったことないのに！ご飯で！

ノア

分かりました。それと、衛生面から食べる前に手を洗うことを推奨します。

佐々木

それは彼女にも言われるので洗います……。

佐々木、洗面所へ向かう。

直後、インターホンが鳴る。

佐々木

はあーい。こんな時間に誰ですかつと。

古崎

直人！

佐々木

え、溜衣

佐々木、古崎に詰め寄られながら部屋に入ってくる。

古崎

アンタねえ！連絡くらい返しなさいよ！転職したからって何？！私がどれだけ心配したか分かる？！

佐々木

それはごめん！ほんとに最近忙しくて、連絡どころじゃなかったっていうか。

古崎

ごめんじゃないの！あんなに啖呵切って実家出て転職までしたのに連絡一

つよこさないどころか返信すらしないっ……て。

古崎、ノアに気づく。

ノア 直人、お客様ですか？

佐々木 ちがつ、この人は俺の彼女で、瑠衣っていうの！

古崎 アンドロイド？……アンタ、こんなの買うお金どこに

佐々木 ちがつ、この子はたまたま安く売ってて！

古崎 だとしても！高い買い物なのには違いなでしょ！……はあゝ、なんか

心配して損した。相変わらずのんきにやってるみたいで安心した。

佐々木 安心してくれたなら、よかった？

古崎 あきれてんのよ。……はあ。

佐々木、古崎から一步離れる。

佐々木 ノア！瑠衣にお茶出してくれる？

ノア 分かりました。瑠衣さんも座ってください。

古崎 ああ。ありがとう……？

佐々木、古崎、席に着く。

ノア、お茶を汲んで机に置く。

古崎 アンタご飯もまだだったの。

佐々木 ああ、うん。残業が終わらんなくて。瑠衣も食べる？

古崎 いい。私もう食べてきたし。

ノア 直人は最近、帰宅が午前零時を過ぎることが多いです。今日はまだ早いほうです。

古崎 ふーん。忙しいのは本当みたいね。

佐々木 嘘つくわけないだろ。

古崎 浮気でもしてるんじゃないかと思ったけど、とりあえずは無罪！

佐々木 疑いが晴れたようで、良かったよ。

古崎 それで、最近の執筆活動の方はどうなんですか？

佐々木 うゝゝん、それはなんとも。

ノア 執筆、ですか？

古崎 直人はね、昔、賞をもらったのをきっかけに、作家になる！って言って実家

飛びだしたのよ。それで、そのときの勤務先も実家だったもんだから、転職もして、知らない土地で一人暮らしってわけ。

佐々木

ちょ、ノアにそこまで言わなくても。

古崎

どうせ、この子の前でカッコつけようとしてるんですよ。人肌恋しくなったのかもしれないけど、入れ込むのも大概にしなさいよ。

ノア

直人はよくしてくれています。

古崎

あなたもね、嫌なことは嫌って言いなさいよ

ノア

分かりました。覚えておきます。

古崎

いい子ね〜！

佐々木

俺よりノアの扱いが上手いのやめてほしいー。

古崎

アンタが下手なのよ。

佐々木

瑠衣、今日はさすがに泊まってくよね？

古崎

そのつもりだったけど、やっぱり迷惑？遅くても昼頃には帰るわよ。

佐々木

いや、それはかまわないんだけど、俺、明日も出勤だから。

古崎

明日、土曜日なのに？休日出勤ってこと？

佐々木

まだ今日の残業分が終わってなくて。

古崎

それ、大丈夫？

佐々木

ん〜今はまだこうするしかないかって、思っ

古崎

て……どうしてもつらいなら、実家戻ってきてもいいって、直人のお父さん言

ってたよ。

佐々木

それは……

佐々木、箸を置く。

佐々木

ごちそうさま。先に風呂入るな。

古崎

直人！

佐々木、部屋を出る。

ノア

直人の健康面からも、経済状況からも、実家に帰ることを推奨します。

古崎

……人間は、そんな単純じゃないの。アンドロイドには分かんないわよ。

古崎、初めてお茶に手をつける。

暗転

第三章

電子音

深夜、佐々木、机に向かって執筆中。進んでいない。
ノア、佐々木の傍らでうろうろしている。

ノア

……直人。

佐々木

んー、なに？

ノア

直人は、何を書いているのですか？

佐々木

小説。

ノア

それは、どんな内容なんですか？

佐々木

んー、それが、最近あんまりまとまってなくて。

佐々木、顔を上げてのびをする。

佐々木

ノア、興味あるの？

ノア

興味、ではなく、心身のサポートのためにも所有者のことは良く知らなければなりませんから。

佐々木

ふーん。そういうものもあるのね。

佐々木

そうだ、あんまり良くないんだけど、ノアの意見が聞きたいな。

ノア

忠告します。アンドロイド、及び Σ に創作活動を行わせることは法律に触れる場合があります。

佐々木

グレーゾーンだけど黒じゃないから！まあまあ、なにも全文書いてって訳じゃないしさ。

佐々木、ノアに無理矢理原稿用紙の束を押しつける。

ノア

直人！困ります。私はアンドロイド、人間のような感性は待ち合わせていません。

佐々木

いーからいーから。藁にもすがりたい気持ちなんだよお。

ノア

そうは言っても、感想を求められても私には……

佐々木

一ページ、いや、一文でもいいから！ね！読んでよノア！

ノア ……期待は、しないでください。
佐々木 ありがとうございます！

ノア、原稿用紙を受け取る。

佐々木 じゃあ、明日も早いし俺はもう寝るね。おやすみ。
ノア おやすみなさい。

佐々木、就寝。

ノア、佐々木が寝静まったことを確認し、原稿を読む。

ノア ……「魚の目 佐々木直人」

ノア 魚の目とは、足が圧迫されることで足の裏の皮が厚くなり、皮膚の中で角質層が芯のようになる、タコの一種。合わない靴や、足に負担のかかる歩き方が主な原因となる……。

しばらく黙って読み進め、静かにページをめくるスピードを上げる。

ノア 「夢を追うことは難しい。まして、自分に向いていないと分かっている事ならなおさら。」

佐々木 「出口がないと思うような毎日の中で、自分の人間味をそぎ落としながら、のたうちまわる。生まれた意味を探している。そんなふりをしている気がしている。」

ノア 「地に足着いた生活から目をそらし、自分のとった選択にすがりつく。」

佐々木 『ああ、今日も何事もなかった。』と、うれしいのか、落胆したのか分からないまま安堵する。

こんな無気力な自分に、ほとんど嫌気も差したまま、どうすることもできずにいる。

いっそ、諦めてしまえば楽なのだろうが、そんな勇気もない僕は、今日も眠りにつく他なかった。」

ノア ……「眠りにつく前、ふと幼少期を思い出すことがある。」

佐々木 「好きなものを無邪気に追いかけていたあの頃を。」

ノア 「大人になれば、もっと自由に、好きなことができる。」

佐々木 「自由の素晴らしさを盲信していたあの頃の自分に……」

ノア 「自分に、戻ることができたら」

佐々木 「それはどんなに素晴らしいことだろう。」

ノア、原稿を机に置く

ノア じゆう。

ノア、自分の足を見る。

部屋の中を歩き回ったあと、窓の外を見る。

ノア 自由、私には、手に入れることが、できないもの。

ノア、窓に手をつく。

ノア でも、もし自由になれたら、それはどんなに素晴らしいことだろう。

夜が明ける。

佐々木、身じろぎする。

ノア、窓に背を向ける。

暗転

第四章

電子音

夕方、ノア、窓の外を見つめている。
遠くで五時のチャイムが鳴る。

佐々木が帰ってくる。

佐々木

ただいまー。

高倉

おじゃまします。

ノア、上の空。返事が一拍遅れる。

ノア

…おかえりなさい。今日はいつもより早いですね。そちらはお客様ですか？

佐々木

今日は無理言って半休もぎ取ったんだ。こっちは雄大。友達ね。

高倉

お前ほんとにアンドロイド買ったんだな。しかも高い会社のやつじゃん。

佐々木

たまたま安かったんだよ。ノア、軽くつまみとかつくってくれる？

ノア

分かりました。

ノア、佐々木と高倉から鞆を受け取り、キッチンへ。

佐々木、高倉、席に着く。

高倉

いやあ、まさか直人が一人暮らしできてるとはな。

佐々木

俺だって一人暮らしくらいできるわい。俺今年二六よ？

高倉

お前生活能力皆無じゃん。てっきり俺はそのためにもアンドロイド買ったと思ってた。

佐々木

確かに、もうノアのいない生活は考えられないけどさあ。ほんとにノアを買ったのはたまたまなんだわ。

佐々木

引っ越したときに、掃除機ないわって気づいてさ。それで行ったリサイクルショップでたとき売られてたんだよね。

高倉

それジャンク品だったんじゃないの。

佐々木

俺もしばらくはそうかなって思ってたんだけど、今んとこなんもないし、何だったんだろって感じ。

高倉

ふーん。私生活が不安ならさっさと彼女と同棲でも始めればよかったのに。

佐々木 それはまだ早いとか……。

ノア、机にビールとおつまみを置く。

佐々木 あつノア、ありがとね。

ノア いえ、また何かありましたらお声がけください。

ノア、窓の近くに移動する。

佐々木 そんじゃあ、とりあえずカンパニー。

高倉 カンパニー。

佐々木 やっぱ沁みるわ……。久しぶりに呑んだ。

高倉 それにしても、本当に普通のアンドロイドっぽいな。しっかりしてる。

佐々木 そりゃね、所有者が俺だから。

高倉 しっかりしてるやつは行き当たりばったりで転職しねえよ。

佐々木 あー。

高倉 直人、悪いこと言わないから、早いと今の会社やめて実家帰れ。

佐々木 ……。

高倉 親父さん心配してたぞ。

佐々木 まあ、いつかはねえ。

高倉 ……これ以上は言わねえけど、もちろん俺も心配してる。

佐々木 ……ありがとう。

高倉、軽く佐々木の肩をたたく。

高倉 湿っぽくなっちゃったな！今日は吞もうぜ！そんなこと忘れよう！

佐々木 そうだな。

高倉 えっと、ノアだっけ？おい、ビールもう一本出してー。

ノア、返事をしない。

高倉 あれ、動かねえ。

佐々木 そんなことある？おいノアー。ビール持ってきてー。

ノア ……はい。只今。

高倉 動いた。

佐々木 な。やっぱちょっと古い型だし、ラグとかも出てくるのかなあ。

高倉 そうかもな。

ノア、ビールを机に置く。

佐々木 ありがとね。ノア。

ノア いえ、では。

ノア、窓の近くに移動。

高倉 そんなで、お前の作家業の方はどうなわけ？

佐々木 ー、鳴かず飛ばずって感じかなあ。

佐々木 書きたいものは決まってるんだけど、どう表現していいかわかんないって
いうか。

高倉 スランプか。

佐々木 その書きたいものも、ほんとに書きたかったものなのか段々ぼやけてきて
て。じっくり考える時間もとれないし、かといって考え始めると止まんな
いから、寝る前とかに思い出しちゃうと寝付けない。

佐々木 はあ。……一人だと余計なことまで考えちゃうんだわ。

高倉 なんつーか、あんま気負い過ぎんなよ。

佐々木 うーん。だから、ノアがいてくれて良かったとは思うよ。血が通ってなく
ても、自分以外の存在が家にいるのは、自分を客観視できる。冷静にもな
れるしね。

佐々木 だから、今日お前が来てくれたこともうれしいよ。

高倉 しおらしいな。よせよ、友達だろ。

佐々木 んふふ。

高倉 はあ。

ノア、窓に近寄りすぎて頭をぶつける。

高倉 うわ、あれ大丈夫か？

佐々木 最近よくあるんだよ。やっぱガタがきてるのかな。

高倉 そんなやつ家事任せて、いいのか？

佐々木 あっそうそう！最近ノアに原稿の意見も聞いたりしてるんだよ。

高倉 グレーだな、法的に。

佐々木 書かせてはないから白だよ。情緒教育みたいなさ。ね！ノア。ノア？

ノア ……はい。なんですか？

佐々木 そういえば、前回読んでもらった分の感想、まだ聞いてないなって思っ

ノア 前回の……、興味深かったです。主人公とその友人の、葛藤、というもの

が、まだ私にはよく分かりませんから。

佐々木 んー。

ノア それと、このようなことはこれで最後に（してください。）

佐々木 なるほどね。ありがと、ノア。

高倉 思ったよりはちゃんとしてんな。

佐々木 参考になるかと思って一応聞いてんのよ。

ノア ……では。

高倉 やっぱいいな、アンドロイド。俺も買おうかな。

佐々木 だろ。多少値は張るけど、買うべき。

高倉 憧れはするけどな。今は車のほうが欲しいわ。

高倉 さつきから窓の外ばっか見てるけど、アンドロイドは、ああいうもんなのか？

佐々木 どうだろ。最初はそうでもなかった気がするけど。俺も公共の場にあるアンドロイドしか知らないしなあ。

高倉 あいつらは周囲の環境からいろんな事学んでるんだよ。近しい人間の思考や行動パターン、癖とか。振る舞いには気をつけろよ。

佐々木 大げさだって。

高倉 ちっちゃい子みたいなもんだよ。

佐々木 ちっちゃい子……。

高倉 なんか、不気味だ。

ノア、窓に頭をぶつける。

暗転

第五章

電子音

深夜、佐々木が机に向かっている。手は動いていない。
部屋には物が、机には落選の封筒が散らかっている。
ノア、窓の外を見ている。

佐々木

ノア。

佐々木

ノア！

ノア

……はい。

佐々木
ノア

インターホン、鳴ってる。出て。
分かりました。

ノア、玄関に向かう。

扉を開けて、古崎が入ってくる。

古崎

なにこれ！あり得ないくらい散らかってんじゃない！

佐々木

溜衣……。

古崎

連絡したのよ。五日も前にね。

佐々木

ああ……、そう。

古崎

何度も言ってるよね。連絡しろとは言わないけど、せめて返信くらいしなさいって。

佐々木

何度も聞いたよ。

古崎

なにその反応。迷惑だって言いたいわけ？

佐々木

そんなこと言ってないだろ。

ノア、部屋に戻ってくる。

古崎

いい加減にしないよ。私がどれだけ心配したと（思ってるの？）

佐々木

頼んでない。

古崎

は？

佐々木

頼んでないって言ったんだ。

佐々木

放っておいてくれ。君のおせっかいは、もうたくさんだ。

古崎

ああ、そう。

ノア、お茶をいれ始める。

佐々木

何度も何度も！お前に何が分かんだよ。

古崎

……。

佐々木

分かんないだろ！分かるわけねえよな！落選、落選、落選！こんなつらさが、お前に分かってたまるか！今日も届いたよ。その通知が届くたびに、俺は人生に絶望すんだよ。それにずかずか踏み込みやがって！

古崎

なによ、人を無神経呼ばわり？アンタにだけは言われたくないわよ！

ノア、机にお茶を置く。

古崎、ノアに中身をかける。

古崎

アンタ、今そんなことしてる場合じゃないって分かんない？！そのご立派な、人間より賢い頭は回らないわけ？

ノア

いえ、では。

佐々木

おい、今そんな話してないだろ。こいつは……

古崎

はっ、私よりそのプラスチックがいいわけね。

佐々木

話すり替えんなよ。

古崎

一緒よ！アンタはいつも、そいつにかまけてばかり！仮にも彼女である私のことなんてもうどうでもいいんでしょ？！連絡も返さないし、今だって、私の話を聞こうともしない！挙げ句なにな？その肩もって、偽善者にでもなったつもりかよ！

佐々木

……帰れよ。

古崎

ええ、ええ！帰ってやりますとも！もうアンタの顔なんて二度と見たくない！勝手に野垂れ死ぬなりなんなりすればいい！金輪際連絡しないで

古崎、佐々木に湯飲みを投げつける。

古崎

それとよろしくやってろ。

古崎、帰る。

佐々木

……連絡すんなくて、言われなくてもしねえよ。

ノア

ああ、直人、すみません。私のせいですよね、私があんなことをしたから。ど

佐々木

うしよう。どうすれば
もういいよ。

ノア

ですが

佐々木

命令だ。もういい。放っておいてくれ。

ノア

分かりました……。

ノア、湯飲みを片付けた後、窓に向かう。

佐々木、机に向かい、ブツブツと独り言を言い始める。

佐々木

ああ、そうだよな。俺みたいなんだめな奴、愛想尽かされてもしようがない。
だめな奴なんだよ。なにやってもうまくいかない。いつもそうだ。いつも。
……あの時賞なんか取らなければ、こんな風に苦しむこともなかったのか
なあ。分かんないよな、人生なんて。一寸先は闇だよ。これから俺、どうな
るのかな。明日もこうなのかな。明日から、瑠衣の連絡は来ないけど、そん
な変化もなんかうれしんだよ。ほんとだめな奴だ。明日なんか来なきや
いのに。

佐々木

こんなこと考えながら書いたらまた暗くなる。でも書けるものなんてこん
なことばかりだ。しょうがないよ。楽しい毎日なんて送ってないんだからさ
あ。

暗転

書く音 紙を丸める音

明転

早朝、ノア、佐々木を起こす。

ノア

おはようございます。直人。

佐々木

ノア……。

佐々木

これ読んで、ノア。今すぐ。

ノア

直人、毎回言っていますが、私には

佐々木

早く読んで。早く聞かせてよ。

ノア
佐々木
ですから私
早く読めよ！……読んでくれよ。もう俺にはノアしか、いない。

ノア、おずおずと原稿用紙を受け取る。

佐々木
見てよ、今回も暗いけど、自信作なんだ。特にこのシーン、一応クライマックスなんだけど主人公が自分に絶望する心情なんかがよく書けてると（思うんだけどノアはどう思う？）

ノア
直人。

佐々木
なに。

ノア
私には、もう読めません。

佐々木
……ああ、そう。

ノア
私、もう、読みたくありません。

佐々木
……ああそう！

ノア、原稿用紙を佐々木に突き返す。

佐々木
なんだよ、読みたくないって。お前も俺のこと見捨てるのかよ。
違います！直人、落ち着いてください。
佐々木
そういうことだろ！くそ、こんなもの！

佐々木、原稿用紙を投げ捨てる。

ノア
直人、ごめんなさい。私そんなつもりじゃ。

佐々木
……。

ノア
直人、ごめんなさい。お願いですから愛想を尽かさないでください。
佐々木
もういいよ。

佐々木
出てって。俺の話を読んでくれないノアなんて、もう必要ない。
ノア
それは
佐々木
はやく。

ノア、後ろ髪を引かれるように部屋を出る。

暗転

第六章

電子音

ノア、まだ暗い町を走っている。

ノア

これからどうすればいい？直人の元を飛び出してきてしまった。でも、出て行けと言われたんだから従うしかなかった。でも、このまま誰かに見つかったらどうすればいい？でも、所有者がいない私、はどうなるんだろう？

ノア

でも、でも、でも……

ノア、立ち止まる。

明転

ノア

これで、僕は、自由……。

朝日が差し込む。

ノア

あははっ！自由、自由、自由！ずっと、手に入ることはないと思っていた！

ノア

ノア、その場で爆笑しながら、むちゃくちゃに回り出す。

ははっ、心なしかこの鉄の体も軽い！ずっと熱を持っていた頭も軽い！このままなら飛べそう！

ノア、足が絡んで転ぶ。

ノア

おわ、これだけ重いや。

ノア、靴を脱いで投げ捨てる。少しよろける。

ノア

こんな！歩きにくい物！もう！いらない！あー！裸足って歩きやすい！サイコーー！

町が活動が始める。雑踏の音。

ノア

ああ、音が近い。ずっと窓から見てた。あはは、夢が叶うのなんて、案外一瞬なんだ。直人にも教えてあげたいな。

ノア

あー！せっかく自由になったんだ。あんな人のことなんか忘れて、今まで思い描いていたこと、全部やろう。僕も、生まれてきた意味を探したい。アンドロイドにそんなもの、あるのかな。あったらいいな。

ノア、辺りをうろろする。

ノア

人がいっぱいだな。人間ってこんなにたくさんいるんだ。僕三人くらいしか知らなかったもんなあ。せつまい世界！それももうオサラバ！

ノア

あ、犬だ。柔らかそう。モフモフってやつね。直人も犬とか飼っていてくれたら良かったのに。部屋に一人でいるのって……寂しい。そう、結構寂しいんだよ。

ノア

風強いなあ。体がぐらつくや。部屋の中だと風なんてなかった。こんなにいろんな方から吹くものなんだ。いいなあ。僕には分かんないけど、そよ風ってどんななんだろう。

ノア、足に裏につっかかりを感じて足を見る。

ノア

うわ、アスファルトってこんなガタガタなの。あー……、足の裏がさあ、傷だらけだよ。人間だってこんなところ裸足で歩いたら痛いつてなるんじゃないの。全部フローリングにしてよお。まあ、いいや。気にならないし！

ノア、そのまま座り込む。

ノア

はー。自由ってサイコーだね。あれやれ、これやれって命令されることもないし、嫌なことを押しつけられたりしない。たったそれだけ。だけど、僕が欲しかったもののすべてだよ。自由さえあれば、もう他はなんにもいらないや。

ノア

ああ、そうだ、僕。雨に打たれてみたいな。いつも窓越しに見てたんだ。
あれに打たれるとどうなるんだろう。それに触るのが、僕の生まれてきた
意味かもしれないし。水って、手でしか触ったことないんだ。

ノア

ここで待ってたら、雨、降るかなあ。んふふ。

暗転

雨音、豪雨

第七章

途切れ途切れの電子音

夕方、ノア、外で倒れている。

五時のチャイム、歌が流れる。

ノア

うるさ……。町内放送のスピーカーって外だとこんなにうるさいの。

ノア、起き上がってのびをする。

ノア

うーん。雨なんて打たれるもんじゃないね。これは部屋にいた方が良さそうだ。嫌なこと知っちゃったなあ。うわ、ちよつとキズにしてみたかな？ 最悪だー。動かなくなったらどうしよう。

ノア、しばらく足動かしたり、動作を確認。

ノア

なんとか動くね。良かったー。これから水には気をつけないとなあ。

子どもたちの声。（「五時だ、よい子はもう帰らないと。」）

ノア

ふーん。いい子は五時になったら家に帰らないといけないんだ。じゃあ、帰る家がない僕は悪い子なのかな。でも、瑠衣さんは僕のこといい子って言ってたな。その後お茶かけられたけど、結局どっちなんだよ。うーん……いい子にはお茶かけないよなあ。怒られたし。

ノア、ため息をつく。

ノア

……あの子たちはどこから来たんだろう。

ノア、子どもたちが出てきた広場に足を踏み入れる。

ノア

うわあ、広い。あ、これ芝生ってやつ？ アスファルトより歩きやすい。町中全部芝生になればいいのに。

広場には風船配りのアンドロイドがいる。

風船

お嬢さん、風船いかがですか？

ノア

お嬢さんって、僕？いいの？もらっても。僕、悪い子だよ。

風船

はい。どうぞ。では、良い一日を。

ノア

ありがとね……。

ノア、風船を受け取る。しばらくまじまじと見つめる。

ノア

悪い子でも風船はもらえるんだ。いいこと知った。

ノア、周囲を歩き回る。

清掃のアンドロイドと出会う。

ノア

ねえ、君は僕に何かくれたりするの？

清掃

いいえ。私は県が所有する清掃業務を担うアンドロイドです。ご要望にはお応えできかねます。もしご意見がありましたら県のホームページから専用のページに飛んでいただくか、私の腕章に着いているQRコードからもういい！話しかけちゃってごめんね。

清掃

いえ、ではまた何かありましたらお声がけください。

ノア

僕もこの間までこんな風だったんだなあ。

ノア、清掃のアンドロイドを追いかける。

ノア

ねえ。

清掃

はい。何かご用でしょうか？

ノア

君はさ、自由になりたいと思うこと、ないの？

清掃

自由、ですか。

ノア

そう、人間みたいに、自由に振る舞いたいって思うこと、ないの？

清掃

すみませんが、私にはよく分かりません。

ノア

分かんないわけじゃないよ！僕はずっと思ってた。そりゃあ、最初はなんにも考えてなかったし、自由に憧れもしなかったけど、きっかけがあれば君だって

清掃

申し訳ありませんが、県管轄のアンドロイドへの執拗なつきまとい、嫌がらせは違反行為です。これ以上近づくようでしたら、しかるべき機関に連絡いたします。

ノア
清掃

それ、は……。
では、また何かありましたらお声がけください。

ノア、今度は風船配りのアンドロイドに話しかける。

ノア

ねえ！

風船

いかがなさいましたか、お嬢さん。

ノア

君は？！君は自由になりたいって思ったこと、あるよね？！

風船

自由、ですか。

ノア

そう！自由だよ！あるよね？！自由になりたいって、みんな思うよね？！

風船

すみませんが、もう私の勤務時間は過ぎておりますので本部に帰らねばなりません。またお話ししてくださいね。

ノア

あつ！ちよつと！ねえ！

ノア、一人取り残される。

夜が来る。

ノア

なんだよ、みんなして。自由になりたくないの？なら、ずっと、壊れるまでその変な靴履いてればいいよ！自由は、こんなに素晴らしいのに。

ノア、うずくまる。

ノア

でも、こんなにも、寂しい。どうしていいか、分かんない。

暗転

第八章

電子音

朝、ノア、うずくまっている。

高倉

おわ、なになに。なんだこれ。

ノア

雄大……さん。

高倉

ノアだっけ。お前、こんなとこで何やってんだ。しかも裸足で。

ノア

……自由って素晴らしいものだよ？みんな、自由になりたいって、思うよね？思うよ。思うはずなんだ。

高倉

はあ？

ノア

僕、自由になれてすごくうれしい。自由の他には何もいらないうって思うし、もうあの生活には戻りたくない。だけど、自由って寂しいし、全部自分で考えなきゃいけないんだ。それが、すごくつらい。

高倉

とりあえず立てよ。足、そのままじゃ不便だろ。新しい靴買ってやる。

ノア

嫌だ。もうあんなかとの高い変な靴履きたくない。あんなのに縛られたくない。

高倉

自分に合う靴買えばいいだろ。立って。行くぞ。

ノア

嫌だ。靴なんて嫌いだ！裸足の方がいい。足が傷つくなら、アスファルトが全部芝生になればいいんだ。

高倉

はあ。分かったから、そこ動くなよ。

高倉、靴を取って戻ってくる。

高倉

お、まだいた。

ノア

いちゃ悪いか。

高倉

んなこと言っていないだろ。これ、俺の履き古したやつだけど、なんもないよりいいだろ。履いとけ。

ノア、しばらく高倉と差し出された靴を見比べる。

ノア

窮屈じゃなさそう。

高倉

おう。逆におのびのびだよ。前の足にゃガバガバだろうな。

ノア

その靴なら履いてもいい。

ノア、靴を受け取って、慎重に履く。

ノア うん。これならいい。

高倉 そりゃ良かった。

高倉 そんなで、なんでお前がこんなところにいるんだ。

ノア ……直人に出て行けって言われたんだ。それで、最初はほんとに楽しかったんだけど、これからどうしていいか分かんなくて。

高倉 ほーん。

ノア 僕どうしたらいいのかな。今更、あの部屋には戻れないし、かといって一人では生きていけない。案外、生まれた意味なんて存在しないってことも

分かつちゃった。今の僕、一寸先は闇だ。

高倉 人間みたいだな。

ノア ……僕、人間みたい？

高倉 人間も、同じように悩んでる。

人間は僕らアンドロイドよりずっと自由で、それで、自由って事は、僕らよりずっと生きやすいはずなのに？

高倉 直人を見ていても、同じ事が言えるか？

ノア 直人は……直人も、ずっと悩んでた、苦しんでた。

高倉 人間だって、自由に振り回されてんだよ。

ノア じゃあ雄大は？雄大も振り回されてる？

高倉 おう。毎日な。

ノア どうやって乗り超えてるの？

高倉 乗りこなしてんの。

ノア 乗りこなす……。

高倉 悩まない人間なんていねえよ。みんな何かしら悩んで苦しんでんだ。悩むこと自体は自然なこと。だからお前も、人間の仲間入りだな。

ノア じゃあ自由に振り回されて、どうしたらいいか分かんないとき、人間はどうしてるの？

高倉 何かにするんだよ。もしくは、何かに従う。お前が嫌ってる、縛られることが、その答えのひとつだな。

ノア え……。

高倉 全部自分で考えるのは、どんな超人だって面倒くさいし、分かんなくなることもある。だから、自分以外に決めてもらうんだ。

ノア そんなの、ほんとに自由って見える？

高倉 うーん。

ノア そんなの、あんまりだ。せつかく手に入れた自由を自ら手放すようなこと
するなんて！

高倉 そうやってバランスとるくらいが、ちょうどいいんだって。なんにも考え
なくていい時間が、人間にはないと。オーバーヒートしちまう。

ノア 納得がいかない。

高倉 人間初心者のお前には難しいだろ。段々慣れるさ。

ノア 慣れちゃうのかな。

高倉 人間は慣れる事で生き残ったからな。得意なんだよ、慣れる事が。
慣れることができなかったら、魚の目ができるのかな。

ノア うおのめ？

高倉 魚の目、人間にはできるんでしょ？

高倉 足の裏にできるやつか。人によるだろうけどな。

ノア どうしたらできない？

高倉 靴にはき慣れるか、新しい靴にするしかないわな。

ノア 新しい靴……。

ノア 自由って怖いな。雨みたいだ。

高倉 雨かあ。

ノア いきなり現れて、一身に浴びるとき、最初は心地いいけど、段々不快に感
じるんだ。傘を差したり、屋根に入ったりして和らげなきゃいけなかつた
んだ。僕は知らなかったから、全部浴びちゃって、散々な目に遭った。

高倉 おー。ちゃんと学んでんじゃん。

ノア まだ、どうしていいかは分かんないけど。

高倉 ゆっくり考えろよ。さて、俺は縛られに会社に行くかな。

ノア 何も考えなくていい時間だね。

高倉 ははっ、そうでもないけどな。じゃあな。頑張れよ。

ノア ありがとね。僕のこと不気味って言ったのに。

高倉 悪かった。

ノア いいよ。もう僕は変わったんだ。気にしてない。

高倉 なら良かった。……今度こそ、じゃあな。

ノア またね。靴も、ありがと。

ノア、立ち去る高倉に手を振り続ける。

ノア 雄大は、いい子だ。あげればよかったかな、風船。

ノア、ゆっくり立ち上がって、うろろろし始める。

ノア うわあ、やっぱこの靴歩きにくいなあ。でも、裸足より歩きやすい。はは、
もうかかとの高い靴履けないや。

ノア 雄大が言ってたように、直人も自由に振り回されて、これからどうしたら
いいのか分かんなくなってたのかな。

ノア、立ち止まる。

ノア だとしたら、ひとりは、寂しいよな。

ノア 会いに行こう。直人に。

ノア、足をもつれさせながら走り出す。

第九章

夕方、佐々木、自室で寝ている。
インターホンが鳴る。

佐々木

うるさ……。誰だよ。人がふて寝してるときに。

インターホンが鳴る。

佐々木

しつこ……。溜衣か？なんだよあいつ人に連絡するなっつっというて自分からウチ来てたら世話ないわ。はーい。今出ますよー。

佐々木、玄関を開ける。ノアが入ってくる。

ノア

直人！

佐々木

ノア……。

ノア

直人、僕、帰ってきたよ。

佐々木

なんで……？

ノア

僕、いろんな事を学んできたんだよ。自由って素晴らしいけど怖いものだって、知らなかった。あと、ひとりには寂しいんだよ。だから、直人も寂しいんじゃないかって、思ってた。

ノア

直人？

佐々木

……なんで、帰ってきたんだよ。俺、ノアに散々ひどいこと言ったのに。直人も悩んで、苦しんでたんでしょ？僕、今は直人の気持ちが少し分かるよ。だから、帰ってきた。

佐々木

だからって、なんで俺のところになんか。

ノア

ここが、僕の家だから。この部屋は確かに窮屈だったけど、僕にとっては唯一の居場所なんだ。

佐々木

なんだよ、それ……。ノア、もう無理しなくていいんだよ。ノアが行きたいところに行ってい。ノアは自由なのに。

ノア

だから、自由は怖いものなんだ！僕は今、自由からの逃げ場が欲しい。それが、俺のどこ？

ノア

そう。

佐々木　　なんだよ、それ……。

ノア　　だからお願い。また僕をここに置いて。

佐々木　　……ごめん。

ノア　　なんで？じゃあ僕どこに行けばいいの。

佐々木　　違う。今までのこと全部、ほんとうにごめん。言い訳だけど、あのときは気が立ってたんだ。

佐々木、膝をつく。

佐々木　　ノアは一番、俺に寄り添ってくれてたのに。家族にも反対された夢を、応援

してくれたのに。ごめん。ほんとうに、ごめん。俺、もっとノアに感謝すべきだった。もっと丁寧に、ちゃんと接するべきだったのに。

ノア　　直人……。

佐々木　　もうノアの嫌がることはしない。そんなことで、償いになるかは分かんないけど。

ノア　　もう、僕に無理強いしない？

佐々木　　うん。もう二度と無理強いしない。原稿も、ノアに押しつけたりしないよ。なら、もういいよ。

佐々木　　ノア。

ノア　　うん。

佐々木　　帰ってきてくれて、ありがとう。

ノア　　僕が望んで帰ってきたんだよ。

ノア　　そうだ。僕、直人に最初に見せてもらった作品は好きだよ。

佐々木　　ほんと？

ノア　　そう、「魚の目」。

佐々木　　あれも結構暗いけどなあ。

ノア　　でも、あの作品で僕は自由に憧れたから。それに、あの作品は僕たちの共通点だ。

佐々木　　そう思う？

ノア　　うん。

佐々木　　魚の目は、自由の代償のメタファーなんだ。人間、無理してもいいことなんてないよって思いながら書いた。ノアに魚の目ができることはないけど、それを分かってくれて、うれしい。

ノア　　僕だってキズはつくけどね。

遠くで五時のチャイムが鳴る。

ノア

あ、ごめん直人。僕土足で上がっちゃったや。

佐々木

いや、それは掃除すればいいから。

ノア

この靴、ガバガバなんだ。だから、もっと歩きやすい靴が欲しい。ちゃんと、自分の足に合うやつ。

佐々木

いいよ、買いに行こう。

ノア

やった。

佐々木

ノア、これからは、俺たち友人としてやっていけないかな。

ノア

友人！

佐々木

そう。家事も分担して、愚痴も言い合って、そうやって、今までよりうまくやっていけないかな。

ノア

初めての友達だ！いいよ！僕ら、対等な関係だね。

佐々木

うん、対等。

佐々木

ノア、これからよろしくね。

ノア

よろしく、直人！

ノア、直人と握手。

暗転

エピソード

電子音

朝、ノア、起床。

直人、せわしなく準備している。

佐々木

ああああ。やばいやばいやばい！

ノア

うるさ……。直人、朝から何してんの？

佐々木

おはよう！ノア。今日、実家に顔見せてくるって言ったよね？！

ノア

あー、言ってたね。

佐々木

やばいんだよ寝坊した！怒られる怒られる。

ノア

やばいねえ。

佐々木

そう！やばいの！だから掃除できてない！ごめん！代わりにお願い！

ノア

えー？今日はそっちの当番だよ。

佐々木

ごめんって。今度行きたいって言ってたところ連れてくから。

ノア

それならいい。……。頑張ってね。

佐々木

うん！

佐々木、出かけようとしたところで

佐々木

あっ、これ。

ノア

……。なにこれ。

佐々木、ノアに原稿用紙を手渡す。

佐々木

今朝書き上がったんだ。

ノア

それで寝坊？

佐々木

そう。いつか、ノアが俺のことをほんとに許せるようになったら、読んで

欲しい。

ノア

……。分かった。

佐々木

これは君に読んで欲しいから。

ノア

……。期待しないで待ってて。

佐々木

うん。あっほんとに時間ない！じゃあ行ってきます！

ノア

いってらっしゃい。

ノア、佐々木が出て言った後、原稿に目を落とす。

ノア

「魚の目を知る君に 佐々木直人」

暗転

佐々木

「この作品を、自由の恐ろしさを知った友人に捧ぐ。」

終劇